

祭り神輿について

丸山 幸雄（南甲弁理士クラブ）



近年、テレビで各地の有名な祭りの様子を放映する機会が多くなり視覚的にはその場にいるかの様な体験ができるようになってきた。しかしながら、山車などであればある程度の雰囲気を感じ取ることができますが、最も一般的で且つ誰でも知っている神輿等では実際にその場にはいないとなかなか味わえない。私の地元の稲荷神社にも神輿が奉納されているが、かつては神輿の担ぎ手が行き先を自由に決められ、ご祝儀が予定に達しないときには隣町の境まで繰り出すこともあったし、待遇の悪い家では自然に神輿が垣根に接触することが思い起こされる。

自動車の影響もあるが、現在では神輿は警察の完全統率下におかれ、行き先は前もって決められ、ご祝儀をもらって氏子の家の庭で練ることもなくなった。そればかりか、神輿がきているのに道に乗り入れてくる車まで有り、昔の面影今はなく、神輿が車を避けなければならぬ寂しい状態である。これでは神輿を担ぐ醍醐味も味わえない。車の交通を禁止できる大きな祭りでもないと神輿を担ぐ醍醐味を体験できる場が無くなってきている。

我が家の近くでの大きな祭りといえば、中央競馬会の東京競馬場近くの大國玉神社で行われる「くらやみ祭り」があり、以前は祭りの時には、府中の町中のすべての灯火を消し、暗闇の中で祭りが行われ、またその中で神事も行われていた。このときは、男女間の垣根も低くなり、戦前は自宅近郊の男子も長襦袢を着た女装姿で府中まで繰り出したと聞いている（徒歩2時間近い）。現在では、消防・警察などからの指導が行われて町中を暗闇にすることが禁止され、戦前のようなこともなくなった。わずかに大國玉神社の境内のみ暗闇にして神事が行われ、神事の行われている間は立ち入り禁止である。

大國玉神社の祭りは時間の流れが昔からかわら

ず、神輿を繰り出す行事をとっても、神社から神輿を出すための行事から参道を経て山門を出るまで4時間近くはかかるという非常にゆったりしたものである。先導の大太鼓は棒で叩くくり抜き太鼓としては日本で一番大きなものから順次連なっており、一見の価値がある。神輿も関東では最も大きなもので、圧倒される重量感があり、夕方から夜明け前まで町中を練り歩いている。参道を出る夕方は経験の浅い若衆が神輿を担ぐため、数分担いでは休む様な状態であるが、最後に神社に帰ってくる明け方近くでは担ぎなれた衆が遙かに少ない人数で存分に練りながら戻ってきている。地元に関連のある人間でないと担げないのが残念であるが、神輿好きな者にとって大きな神輿を担ぐことが喜びであり、近郊のみならず遠方からも伝手を頼ってくるのではないかと思う。

このように日本ではごく一般的な神輿であるが、ご神体を肩に担ぐことは世界的には非常に珍しく、他にほとんど例がない。神輿の起源については種々の説があるが、夢をかき立てられるのでは、古代イスラエルのモーゼの「契約の箱」が日本にたどり着き、これを担いで日本に上陸した様子を皆で祝ったのが神輿の起源、あるいはその後「契約の箱」が日本国内を移動した様が広く各地に伝わりこれが神輿の起源となり現在に至っているという説が雄大で浪漫をかき立てられる説である。

旧約聖書には、古代ユダヤ民族（現在のスファラディ・ユダヤ人が該当し、アシュケナジー・ユダヤ人（白人系であるカザール民族系ユダヤ人）は含まれない）が、東方に移動したことが記載されており、移動先は明らかではないが内村鑑三など多数の学者が日本にたどり着いて原日本人の一部になったと主張している。

その後、古代イスラエルがアッシリア若しくはバ

ピロンに占領されて「十戒の石版」「マナの壺」「アロンの杖」の三種の神器を収めた「契約の箱」が占領者に持ち去られるとして、「契約の箱」が密かにいずれかに移動させた。何時「契約の箱」が移動したのか明らかではないが、葦船で海路船出し、黒潮に乗って先に古代イスラエル人が移り住んでいた我が国に渡った可能性は否定できない。

到着場所としては黒潮に乗って来ることが可能な丹後半島にある元伊勢の「籠神社」近辺が有力である。「籠神社」の御神体はなんと「マナの壺」であるといわれており、この「籠神社」は奥宮に「真名井(まない)神社」があり、その石柱にはユダヤと同じ「六芒星(ダビデの星)」の紋章も刻まれている。

他にも、例えば「ヘブライ」を想起する東北地方の戸来村(ヘライ村)に歌い継がれている民謡「ニイヤドレ」、岩手県の「ナギヤドヤラ」が古代ヘブライ語で神を賞賛する歌詞である事実などもあり、失

われた古代ユダヤ民族が日本にたどり着いたという説を強ち否定できない。

この「契約の箱」について、旧約聖書は、具体的な寸法と共にアカシアの木で箱状に造り、上側、内側及び外側を純金で覆うこと、及び箱の角部に設けた輪に棒を通して手で触れることなく肩に担いで運ぶべきことが記されており、この形態はまさに神輿と近似している。

祭りの神輿を眺めながら、神輿が「契約の箱(失われたアーク)」に連なっていると感じ、「十戒の石版」には今でも大いなる力があるのか思い馳せるのも楽しい。

新しい神社での祭りでは、担ぎ棒の上にご神体である神輿に尻を向けて乗るなどの所業がまかり通る現在だが、神輿を担ぐ元々の意義は、ご神体を担いで氏子(信者)の近くに運んで皆で祝い喜ぶことにあるのであり、今一度原点に戻って世の中を考える事も必要ではと考える今日この頃である。